

フランス人士官ルイ・クレットマンは、一八七六年（明治九年）から一八七八年（明治十一年）まで、フランス第二次軍事顧問団の一員として日本に滞在し、様々な資料をフランスに持ち帰りました。これらの資料はその大部分が、彼の孫ピエールの寄託によって、私の勤務するコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所に保管されています。二〇〇〇年には横浜開港資料館で、この資料の中から特に写真に焦点を当てた展覧会が開催されました¹⁾、それと前後して日本語でも単行本を含めたいくつかの紹介が行われました²⁾。

本日は、このクレットマン・コレクションと呼ばれるものの中で、今までごく部分的にしか言及されてこなかった地図類と分類されているものを紹介します。クレットマンは当時フランスの最先端の科学技術教育が行われていたエリート校の一つ、エコール・ポリテクニクを卒業したばかりの軍事技術者で後にその校長になります。士官学校でも地図作

¹⁾ 同展覧会のカタログは、展示物のリスト以外には作成されなかった。ただし、展示された写真とその解説をもとに、いくつかの研究論文を加えた日仏二ヶ国語による、『フランス士官が見た近代日本のあけぼの』ニコラ・フィエヴェ、松崎碩子編（東京：アイアールデー企画、2005）が出版された。編者の一人、松崎氏はEAJRSの年次会議において四度にわたって、このコレクションの写真、クレットマンが残した日記・手紙、さらには「獻英樓畫叢」（けんえいろうがそう）と呼ばれる四冊の貼交帖を紹介している。私自身も、クレットマンが残した講義原稿、そこから翻訳された日本語教科書と同じくEAJRSの二〇一〇年の会議で紹介した。残念ながら、これらEAJRSにおける発表は、そのサイトからは、高々要約しか閲覧できない。

クレットマン・コレクションの「獻英樓畫叢」については、西野春雄「コレージュ・ド・フランス寄託『獻英樓畫叢』稿」『国際日本学』第3号（法政大学国際日本学研究センター、2005）、長崎巖「新発見資料・ボストン美術館蔵「獻英樓畫叢」に関する調査報告」『能楽研究：能楽研究所紀要』30(2005)（法政大学能楽研究所を参照。これらは、能、ならびにその装飾に関する専門家による紹介だが、フランス人研究者が、この四冊中の怪奇物を扱った一冊だけを特に翻刻・翻訳・解説した以下の研究書が、多くの図版を交えて、二〇一三年秋に刊行される。Monstres et prodiges dans le Japon d'Edo : traduction et commentaires de l'album Tayasu 84, Alain BRIOT (Institut des hautes études japonaises, Paris, 2013)。

²⁾ 『若き祖父と老いた孫の物語：東京・ストラスブル・マルセイユ』辻由美新評論（2002）は、孫ピエールによる資料発見とその後も活写したエッセイだが、著者独自の資料発見にもとづく、有益な情報も提供してくれる。孫ピエールは、ルイの日記・手紙を翻刻して、以下の自家出版を行った。Deux ans au Japon 1876-1878 (t. 1, carnets de route; annexes. t.2 extraits des carnets de route et des lettres), Pierre Kreitmann (Marseille 1995-1996). その抄訳とクレットマン関係資料の簡単な紹介が、清水智子「在マルセイユ日本関係資料調査報告—ルイ・クレットマン『二年間の日本滞在—一八七六—一八七八』を中心に—」、『横浜開港資料館紀要』第十七号、一九九九年にある。

成や測量術に関する・演習授業を行っています。そういった地図の専門家とでもいえる彼の地図コレクションは、興味深いものがあります。

寄託に際して作成された目録の中で地図類と分類されているものは全部で二十七点（重複を数えて三十部）です。今回はそこからいくつか選択して紹介します。この二十七点の中には、英文観光ガイド四点〔11〕,〔2〕,〔3〕,〔4〕³、当時の日本の地理学の教科書や地図帳が三点〔15〕,〔6〕,〔7〕³が含まれます。

最初の二〇〔11〕,〔2〕は、冊子自体にはどこにも記されていませんが、お雇い外国人で、欧米における初期日本研究者のひとりとして数えられるアメリカ人、グリフィスが書いたことが分かっています。初版が一八七五年の日光ガイドは内部にサトウの名が記されて、彼はこれを元にして、その後版を重ね、チェンバレンがあとを継ぐことになる有名な日本旅行ガイドを一八八一年に出版することになります。これらガイド四点の内三点が一八七四年、のこり一点が一八七五年に初版が出版されています。なぜ、この時期に集中しているのでしょうか？

一八五八年に結ばれた欧米諸国との修好通商条約では、各国籍の欧米人は、居留地から十里以内とされていた遊歩区域を越えて旅行することが、原則として禁じられていました。そのことをよく示す、よく知られた地図があるので、それをインターネットで見てみます。十里、およそ40キロメートルというのは目安で、各港に対して遊歩区域が決められており、たとえば横浜の場合は、ご覧のように、多摩川を越えて江戸・東京方面に行くことが禁じられていました。この状態が、一八七四年に「内地旅行規則」が規定されことで変わります。一定の条件付で多少自由に旅行ができるようになるのです。

³ 上記 Inventory の番号。以下、同様の書式で引用する。

旅行ガイドの出版は、一定数の旅行者の存在を前提にしています
が、それはさらに商業的移動手段の普及、ここでは蒸気船の海外定期航
路の発展を前提にしています。その発展を簡単に表にしたものみでいた
だきます。イギリスは、フランスより十年以上まえに上海まで定期航路
を延ばしています。一八六七年にサンフランシスコ・横浜・香港の定期
航路が開通したことで、定期航路による世界一周が可能になります。そ
の年に出版された欧文観光ガイドで、中国と合わせてですが、日本に最
初に触れたのが、Denny, N. B 他による『*The treaty ports of China and
Japan : A complete guide to the open ports of those countries, together
with Peking, Yedo, Hongkong and Macao. Forming a guide book & vade
mecum for travellers, merchants, and residents in general* (1867,
London, Hong Kong) です。

中国における開港の数は日本の比ではありませんし、旅行許可条件⁴
も日本ほど厳しくないのです、このガイドの本文の大部分は中国に関する
ものですが、それでもタイトルに見られるように、まずは Treaty Ports
条約港があつて、それに北京や江戸が続きます。内陸まで行く時間のな
い旅行者は条約港周辺だけを訪れ、次の港に向かったと想像されます。
先に見たグリフィスのガイドで、旅行規制の条件が緩和された後も、横
浜のガイドの方が東京のガイドよりも厚いことにも納得がいきます。ま
た、この一八六七年のガイドの最後には、ヨーロッパを代表する二つの
商船会社、イギリスの P&O とフランスの Messageries Impériales (後の
Messageries maritimes) の船の運航に関して、その日付、旅行日数、船
名など具体的な情報が記されていて、興味深いものです。

⁴ イギリスと結ばれた南京条約 (1942) で上海を初めとする五港が開かれる。天津条約 (1958) ではさ
らに十港が開かれた。イギリスとの同条約第九条は、旅券発行はイギリス領事館が担当し、距離が百
里、期間が三十五日を超えなければ、旅券は不必要と定めている。

その後の発展で重要なのは、一八六九年のアメリカ大陸横断鉄道の開通とそれに続くスエズ運河の開通でしょう。こういった定期航路の発展を追う様に、電信網が世界的に発展します。もともと、この電信網は最初は民間には公開されていません。日本では長崎が東京に先立って、明治四年に上海とウラジオストック⁵に結ばれます。こういった発展を受けて、一八七一年には、Thomas Cook 社が世界一周旅行を商品として企画し、一説ではそれが一つの刺激になったと言われる有名な Jules Verne の『八十日間世界一周旅行』の雑誌掲載が、一カ月後に始まりま

す。我がクレットマンも、こういった時代背景の中で日本に到着します。一八七四年の旅行条件緩和の後も、一種の旅券をもらって休暇中の旅行を楽しみます。あるいは、許可がなければこれより先は外国人は立ち入り禁止といった立ち札に出会っています。また、同僚がどの国を観光しながらに日本に着いたか、一時休暇やフランスへの帰国でどいった国を経由するのか、日記や手紙で盛んに話題になります。彼自身アメリカ経由で帰りますが、その旅行費用を出すために、節約・貯金している様子が日記・手紙からうかがえます。

では、地図の内容を見てみましょう。二十点の地図の内、軍事関係と分類できるものが五種あります。この五点を除いた十五点は、当時普通に流通していて、簡単に入手できたと思われる日本製の地図です。

⁵ 上海とは八月一日（旧暦六月十五日）に開通。ウラジオストックはそれに続く。いずれも、デンマークの大北電信会社 The Great Northern Telegraph Company による。

⁶ この時期の外国人の日本の旅行条件に関して、さらに詳しくのこととは、『世界漫遊家たちのニッポン・日記と旅行記とガイドブック』（横浜開港資料館、1996）を参照。題をテーマにした展覧会のカタログで、当時発行された旅券の写真など、興味ぶかい資料も見られる。

それを、地域別に分類すると、東京・関東が六点、京都・大阪が六点、そして日本全体を入れた地図が三点です。

まず最初にお見せするのは、この東京近郊の地図に数えましたが、必ずしも地図とは呼べないもので、『内国勧業博覧会場一覽道案内』[8]です。明治初期の内国勧業博覧会さらには日本が参加し始める万国博覧会に関しては、国会図書館のサイト上に豊富な資料・画像を引用した日英二ヶ国語版の電子展示会がありますので、背景などはそちらを参照してください。この案内図は、内国勧業博覧会と銘打たれて行われる最初のもの、明治十年、八月から十一月にかけて開催されたものです。クレットマンはその日記や手紙で言及しているように、見学に出かけており、その際この案内図を購入したと予想されます。明治天皇が臨席した閉会式にも参列しており、不忍池の上に飾れた提灯を描写しています。先に触れたグリフィスの東京ガイドは一八七四年発行ですから三年前の発行ですが、*Hakurankai (General Exhibition)* と称して、その当時からすでにあった一種の物産会を東京の名所として紹介しています([2], p. 29)。

次は、クレットマンが自分や同僚・友人の家や仕事場などを記入した東京の地図です[9]。書き込みが異なる、同じ地図が二部あります。次は、彼が住んでいた家を含む、住宅図とでもいえる小さな地図です[10]。一見面白みのない地図ですが正確なもので、山県有朋の家、英国公使館、招魂社などが簡単に確認できます。郵便配達夫によって利用されていたのでしょうか？

関東地方を扱った残り三点は、伝統的な絵図で、そのひとつは日光の案内図[11]、残りは関東全域を扱った道中図です。フランス国立図書館(以下 *BnF*)は類似の日光案内図を所蔵しており、そのサイトから閲覧できます。道中図と言うのは、名所・名産、さらには宿場間の距離を

詳細に記した旅行ガイド兼地図ですが、そのひとつ[13]をごらんいただきます。クレットマンが、地名を書き込んでいるのがわかります。距離に関して丁(町)、すなわち百メートル強を最小単位としたかなり精密なものです。東京・皇居という文字や凡例にある旧の字が太くなっているのは、これが後から加えられた文字であること、すなわち江戸時代の地図を明治になってから、最低限の修正を加えて出版したものであることを示しています。

関西地方の地図六点も、関東地方の地図のように、京都や大阪を扱った都市図ともっと広域を扱った道中図に分類できます。一例として堺事件に言及した鉛筆での書き込み⁷のある和泉と河内の二国を描いた絵図を見ましょう[14]。

関西地方の最後を飾るのは、地図とは呼びにくいかもしれませんが、五雲亭(歌川)貞秀(1807-1879?)作の『京都一覽図画』[15]です。今回の会議のプログラムの表紙に使用したものです。作者の本名は橋本謙(次郎)、玉蘭齋の号名を使うこともあり、地理学者としても横浜浮世絵画家としても知られている人で、BnFの*Gallica*からは、彼が描いた有名な横浜港の絵を見ることができます。初版が一八六四年であることが分かっているこの絵も比較的よく知られている絵で、ご覧のように二千年に神戸市立博物館で『絵図と風景―絵のような地図×地図のような絵』という展覧会が開催されたときにも、そのカタログ⁸の表紙に使われたものです。クレットマンが興味を引かれて持ち帰っていることに注目したいと思います。

⁷ "Myokokuji temple où 11 samourai se sont ouvert le ventre."

⁸ 神戸市立博物館, 2000。

最近の貞秀の研究で刺激的なのは、表紙をご覧いただいている

論文集『地図と絵図の政治学』の中の Smith 論文です。この論文の中で、Smith は一七世紀オランダ絵画が専門の美術史家 Alpers の研究、*The Art of Describing*⁹⁾ の第四章、*The Mapping impulse in Dutch Art* を参照します。Alpers は、一七世紀オランダの風景画に、一視点から見たことを想定する遠近法とは異なる画法を見出し、鳥の視点を想定する鳥瞰 (*bird's eye view*) という用語は、その種の絵を形容するのに適していないとしています。それを受けて、Smith は、日本の一連の一覧図もこういった特定の観測者のいない、地図に近い十七世紀オランダの風景画 (*Alpers* は *mapped landscape* という言い方を提唱しています) に近いのではないかと言います。

参照されている Alpers の著作の第四章は、その題が示すように十七世紀オランダにおける地図と絵画の密接な関係を、丁寧に検証しています。たとえば、地図を作るために旅行する測量士 (*surveyor*) と、旅行しながら都市・風景を描く画家を比較します。なるほど、前者は計量を行います、画家同様に目安になる建物、自然の地形も観察しその位置を記します。後者は、なるほど計量は行いませんが、正確に風景を描こうとします。また一般にこの時期のオランダにおいて、「描くこと」(ギリシア語の *grapho*) ということを通じて、地図製作者と画家が一連の技術を共有していたこと、実際にこの二つの分野で仕事をしていた作者の例をあげます。たとえば、数学者・地理学者で広くヨーロッパに普及する作図道具も作成し、よく知られた地図画法に名を残すメルカトル

⁹⁾ 邦訳『描写の芸術——十七世紀のオランダ絵画』(ありな書房、一九九三年)。その他、フランス語、ドイツ語、イタリア語にも訳されているのは、同書の呼んだ反響を反映しているだろう。

(Gerhardus Mercator, 1512-1594)は、地図の作成法を述べた著書の中で、ペンの持ち方を図入りで説明します。

社会・経済的な背景まで考察しながら自分のテーゼを展開する

Alpers の議論がどこまで、江戸時代末期の「地図のような絵」・「絵のような地図」を描いた画家³⁰に当てはまるかは、一概には言えませんが、地図と絵画の関係を考える上で、彼女の議論は無視できないものでしょう。また、遠近法の「欠如」、その「不完全な」適用と形容されがちな江戸時代の風景画を、そういった否定的な形容ではなく、肯定的にとらえるための参考になるかもしれません。

いずれにしても、貞秀が単に、地図のような絵図だけではなく、立体性のない多くの地図を書いた浮世絵師であったことは事実です。そして、クレットマンが持ち帰った『京都是一覧図画』ですが、左端の山腹に枠を作って、正面の一覧には入らない風景を部分的に入れるという手法は、地図の経度・緯度からはみ出るもの（例えば離島）や縮尺の異なる部分図（たとえば都市図）を、差しさわりのないところ（たとえば海）のところに加えるという、地図ではおなじみの手法を思い起こさせます。

Smith がその政治性を分析するのは、一八六四年に刊行された「大日本海陸名所図会」です。早稲田大学の古典籍のポータルで見ることのできる、この絵図の（たとえば、下関海峡の一覧を選んで大日本と題するといった）特異性とその分析は、Smith の論文に譲ります

「一覧のように、日米の研究者による共同出版の書籍を、写真まで載せてわざわざ紹介する理由のひとつは、その表紙にも、貞秀の絵が使

³⁰ 北斎の『略画早指南』前編（文化9 = 1812）が、コンパスと定規を使った画法を説明していることが思い出される。北斎は、オランダの画法書を読んでこういった作図法を紹介した森島中良の『紅毛雑話』（1787）に影響されている。

われているからです。同書の収められた九論文の内、貞秀を扱ったものはSmithの一論文だけであり、なおかつその論文中にはこの絵に対する言及がないにもかかわらずです。表紙に使われた絵、『横浜道中見物双六』は、その名が示すように双六ですが、少し面白い仕掛けのある絵で、Smithは表紙裏の解説小文で、その背景にあるものを貞秀の遊び心、「画遊」の精神と読んでいます。

もうひとつ、この研究書を重要視する理由は、以下に述べるように、Smith論文以外にもクレットマンの持ち帰った地図に関連した論文を二つ掲載しているからです。そのひとつ、馬場章氏の論文に触れるため、日本全土を扱った地図を見てみましょう。三点とも興味深いものですが、今日は、最後の『増訂大日本国郡輿地路程全図』[23]に焦点を絞ります。クレットマンが持ち帰ったものは、明治四年に刊行されたもので、ご覧のように北海道と国後、択捉、サハリンが異なる縮尺で付け加えられているのが、すぐ分かりますし、地図内部にもそのことに対する但書きがあります。

詳細は馬場章氏の論文に譲りますが、この地図の初版・原版本は、一七七九年（安永八年）刊行の、長久保赤水という学者による『改正日本輿地路程全図』、しばしば「赤水図」とよばれる当時非常に普及した地図です。これを基にして、多くの改訂版、海賊版、模倣版が一世紀以上に渡って出版されたっており、赤水の名はクレットマンの持ってきた地図内にも記されています。やや遅れて作成される伊能忠敬の地図は、だれでも耳にしたことがあるでしょうが、「忠敬図」はなるほどより正確であったにしても、幕府の事業として行われて、その成果は長い間一般には普及せず、明治に入ってもまずは軍部の手に渡ります。それと対照

的に、「赤水図」は十八世紀末から広く普及し、民衆の好奇心を満たすことに貢献したのです。

初版の赤水図は、十八世紀末に日本に滞在し、パリでなくなったオランダ商館長（カピタン）Tisingh (Issac, 1745-1812) も購入してヨーロッパに持ち帰り、シーボルトも日本に来る前にすでに目にいた可能性が高い地図です。さらに、シーボルトは最初の滞日後に著した

Nippon (1832-1852) の中で、「赤水図」を書店で自由に買えて、教養のある人の手元にある、ごく一般的な地図と報告しています。かなりの部数がヨーロッパに渡っており、ライデン大学には全部で八部、そのうち三部がシーボルト・コレクションに属します。さらにその一部には地名と国名に通し番号がついていると、馬場章氏は報告しています。同様に数字入りでオランダ語の書き入れのある「赤水図」がBNFにもあり、Gallicaにuploadされているので、見てみます。ヨーロッパ各地を調査旅行して論文を書いた馬場氏は、残念ながらフランスには立ち寄っておらず、このBNFの地図を見いていません。なお、このBNFの地図は、一八四〇年に購入されたもので、Tisinghの手元にあった地図のひとつであることがほぼ確実です¹⁾。各国(藩)の名前のところが黒く塗られ、その上を引かくようにして国名に対する番号が記され、各国ごとの地名に一番から順に赤い番号が付けられているのが分かります。また、同じ赤でオランダ語の書入れがあります。鉛筆による書き入れもあります。

¹⁾ BNFの同僚 Véronique BERANGER の調査による。競売カタログ Landresse, Ernest-Augustin-Xavier Clerc de, *Catalogue des livres imprimés, des manuscrits et des ouvrages chinois, tartares, japonais, etc., composant la bibliothèque de feu M. Klaproth. (Rédigé par Deixon, C. Landresse.)* Paris : R. Merlin, 1839. - 2 parties en 1 vol. in-8 の三五頁、第一三三番の地図が Gallica で見れる地図で、BNF (の前身) は同じ地図の異なる版とカタログに記されている次の第一三四番も購入している。カタログにはいずれの番号の地図の説明にも Tisingh の名は記されていないが、次の第一三五番 (BNF が所有しているかは今のところ不明) の地図に対しては、オランダ語による Tisingh の書入れと、フランス語による Klaproth のそれがあると記されている。Klaproth と Tisingh の関係を考えるところで問題になっている地図も Tisingh が最初、所蔵していたものと推測される。

最後に、軍事関係と分類した地図の一つに簡単に触れます。約一メートル20センチ四方の大型の「九州全図」[25]です。現在の私たちには、普通の九州地図にみえるこの地図を、私が軍事関係の地図に分類する理由のひとつは、発行が陸軍省参謀局となっているからです。この地図は一九七七年二月に発行されていますが、二ヶ月後にこの地図をさらに詳しくした「西海道全図」が同じところから発行されていて¹²、たとえば国立公文書館のデジタル・アーカイブで閲覧できます。いずれも、西南戦争の真っ只中です。戦略的に重要だった電信線や郵便線路が（「西海道全図」では赤線で）道路とならんで記入されています。軍事的な目的で作成・利用されたことは明白でしょう。クレットマンにとつてはほぼ同年代の生徒や同僚の日本人教師が政府軍として参加しており、彼らの安否を気遣うこともあって、彼が西南戦争に興味を持っていたことは、日記や手紙からも明らかですが、実際私たちの「九州全図」には、反乱軍の蜂起があったと思われる場所に地名を書き込んでいます。その一例を拡大してお見せします。

次に、すこし毛色を変えて、技術的な地図を紹介します。これはクレットマンの先輩で前任者にあたるジュールダン（Jourdan, Claude Gabriel Lucien Albert, 1840-1898）が日本を離れる際に、クレットマンに渡したと思われる地図のひとつです。彼の日本製の朱印が押されています。ほとんどの記載が英語の東京(江戸)湾の海図[26]です。この時期に欧米人によって作成された日本沿岸の海図に関しては、横山伊徳氏の詳しい研究がある。

¹² この二つの九州の地図の比較、さらには伊能図との関係についての短い分析が清水靖夫「近代での伊能図の動き―軍管区図」『伊能忠敬研究』第二十九号(2002)、十一・十三頁にある。同論文は、http://www.inopedia.jp/imgf_users/r_107820540img20100626093601.pdf にもアップロードされている。

ります。この地図も、薩摩屋敷の存在や英国公使館が東禅寺にあるとされていることから、幕末の作成であることがわかります。議論の詳細は省きますが、横山氏の研究やこういった傍証よって、この地図ももとは幕末に英国海軍が作成したもので、それにフランス人が鉄道線¹³その他を書き加え、士官学校の授業で利用したと想像できます。コンパスによる赤い作図は、言うまでもなく、砲台からの大砲の射程距離を表します。数字は水深ですが、単位は *fathom* (≒約一・八メートル) です。八つ山というのは今も品川駅周辺に地名が残る実際にあつた小さな山ですが、その砲台と思われる印が、さらに南には大きな要塞¹⁴と思われる図が書き加えられています。これらは、実際にこういった施設を建設する計画があつたというよりは、軍事教育の演習¹⁵の一環としての、仮想の設備と考えるべきでしょう。その他の細部にも興味深い点の多い海図ですが、同様な海図でさらに南の浦賀水道¹⁷を扱ったものも残っています。

以上が地図類二七点の全体ですが、そこに属さないがクレットマンがフランスから持って帰ってきた地図が三点あります。孫のピエールが横浜開港資料館に寄贈した地図です。これもジュールダンの名が記されていないもの、彼が日本人技術者と共同で作成した、あるいは彼の指導ともとで作成され、先の海図二点同様に、クレットマンに手渡したことが間違いない地図です。まったく印刷されたところのない、手書き・手

¹³ Jourdan の来日は第二次軍事顧問団の一員として一八七二年五月、鉄道開通は同年十月(いずれも太陽暦)。

¹⁴ « le capitaine Jourdan manifeste l'intention de me faire étudier le projet d'un fort à construire sur le bord de la mer, à une lieue environ d'ici, près de Shinagawa; nous devons aller après-demain étudier le terrain ensemble. » (Lettre, le 2 mai 1877)

¹⁵ この時期の陸軍士官学校の一士官・生徒が残した図面が発見され、以下の論文の筆者によってデジタル化されている。唐沢靖彦「草創期の陸軍士官学校における技術教育・宮本照明中将資料」(『戦いと甲斐に関する比較文化史的研究:2007・2008年度学内提案公募型研究推進プログラム基盤的研究』北村稔編(立命館大学 2009)所収)。そこには、クレットマンによる授業中に作成されたと思われる図面も含まれている。たとえばこの宮本中将は、実際に明治十四年に起工された東京湾富津岬沖の第一海堡とは異なる図面を明治十二年夏に作成しているが、これも唐沢氏が指摘するように、授業の課題としての作図であろう。

塗の地図です。軍事的な要所の地図ですが、そのひとつ、『備後国御調（みつき）郡大浜村泉水山砲台及大立場一千分之一図』をお見せします。これは、広島県の向島と因島間の布刈瀬戸とよばれるところ、現在はちようど本州四国連絡橋の尾道・今治ルートがかかっているところですが、砲台という言葉があるのは、広島藩が幕末にすでにここを軍事的な要所と定めて砲台を建設していたためです。

以上、ある時期の日本に滞在した一人のフランス人が入手した地図・地理関係の資料を、駆け足に紹介したので、結論を述べるのは無理があります。そこから、様々なアプローチによって、様々な研究分野と関連した、歴史の様々な側面が見えてくるといえば、平凡な感想になるでしょう。インターネットに地図が **upload** されることで、その研究が一般に推進されると言うことも、実感しました。